

まつり
が育む
地域の力

現代社会における 子どもの通過儀礼

八木 透 ● Written by Toru Yagi 佛教大学歴史学部教授

筆者が住む京都では、三月から四月初旬の休日には、観光地として知られる嵯峨嵐山の法輪寺で「十三参り」が行われる。数え十三歳になった子どもたちが、法輪寺の本尊である虚空蔵菩薩に参詣して知恵を授かるとされる行事である。このような人生の節目に行われる儀礼は、ほかにも数えれば枚挙に暇がない。

一昔前と比べると、今では子どもの成長を願う諸儀礼や、子どもから大人への移行期に行われる伝統的な儀礼がずいぶん廃れ、その結果、年齢や世代の秩序が曖昧になってきているように感じる。しかし一方で、現代でも、子どもたちの健やかなる発育や健康、そして安らかな老後や長寿を願い、人々は意外と頻りに神仏に手を合わせていることも確かである。私たちは望むと望まざるとにかかわらず、

生を受けた者はやがて成長し、そして老い、いずれは死を迎えるという宿命を背負っている。人生の節目に行われるこれらの儀礼を、民俗学では「通過儀礼」「人生儀礼」「冠婚葬祭」などと呼び慣わしてきた。それらの中で、本稿では子どもの無事なる成長を願い、また子どもから大人への橋渡

しとなるようないくつかの儀礼を題材として、現代社会における通過儀礼の存在意義について考えてみたいと思う。

＊ 子どもの無事な成長への 願いは変わらない

社会生活においては個人化が進み、くらしのすべてにおいて合理化が蔓延^{はびこ}る現代社会の中で、日常で神仏に祈りを捧げる機会は一昔前と比べると減少したといえる。そんな中でも、人々は常に切なる願いを持ち、特にその願望が科学の力ではどうすることもできないものである場合、私たちは過去とさほど変わることなく、神仏の前で頭を垂れ、心底から願いの成就を祈る。安産や新生児の無事なる発育への願いなどは、まさに現代人がもつとも謙虚な心情で神仏の加護を求める例ではないだろうか。

近年、出産は一部の例外を除いて、ほぼすべてが病院で医師の管理のもとに行われるようになったため、出産に関わる民俗的な儀礼はほとんど見られなくなった。たとえば、かつて出産が家で行われることが普通であつ



十三参り 十三参りで一文字の漢字を書く女兒

た時代、新生児の魂を左右するものとして、胞衣をめぐる諸儀礼が重要視された。胞衣とは、あしぐん後産なども呼ばれる、いわゆる胎盤のことである。胞衣の処理の仕方は、墓地に埋葬する、胞衣壺に入れて屋敷地内に埋める、玄関の敷居の下に埋めるなど、かつては地域によってさまざまな伝承が聞かれた。胞衣は新生児の一種の分身のように考えられており、新生児の性格、健康、運命などに大きな影響を及ぼすものと信じられていたのである。しかし今日の病院出産では、胞衣は単なる汚物として処理されてしまうため、過去のような胞衣をめぐる儀礼はまったく行われなくなつて



初宮参り 孫娘を抱いて氏神に参拝する祖母 (イラスト: 竹添 祐子)

しまった。

ところが、母子が病院から家へ戻つて来ると、そこからは乳児の無事なる成長を願う民俗的な儀礼が、昔とさほど変わることもなく行われているようだ。たとえば、生後三十日目前後に行われる初宮参りは、氏神に氏子として認めてもらい、またかつては、共同体の一員として承認されるための第一段階の重要な儀礼であった。初宮参りの際に、子どもの額に男児なら「大」、女児ならば「小」の字を書くという慣習は今日でも京都やその周辺地域では色濃く残っている。これは「アヤツコ」と呼ばれ、もとは二つの線が斜めに交わる形状を指し、竈の墨や鍋

墨で「X」の印を付けるものであった。それがいつしか本来の意味が忘れられて「大」や「小」の文字に変わり、また鍋墨では汚いので紅が用いられるようになった。アヤツコは異なった二つの世界が交差することを意味する印で、それが転じて魔除けとみなされるようになったのである。現代の若いお父さんやお母さんは、このような本来の意味は知らなくとも、年寄りのアドバイスに従って昔ながらの習俗を継承してい

るのである。

また、子どもの生後百日目は百日ももかなどと呼ばれる。この時期に食い初めを行うことも、関西地域ではまだまだ広く行われている。子どものための膳を新調し、男女児にそれぞれふさわしい茶碗や箸を準備して祝う。子どもの家では赤飯を炊いて尾頭付きの魚を添え、親戚を招いて飯粒を子どもに食べさせる真似をする。日本人はかつて、米は神から授けられた特別な呪力を持つ食物であると考えていた。子どもに飯粒を食べさせるのも、米の呪力で小さな魂に生きるためのエネルギーを補充するという意味があつたのだろう。

このように、産まれたばかりの子どもは、しばらくの間、象徴的な意味において前世との繋がりの中で育つのであり、そこではさまざまな霊的な力に頼つて子どもの無事なる成長を願つたのである。いずれにしても、新生児をめぐる儀礼の中には、小さな魂を神仏の力を借りてでも守らねばならなかった時代の、親たちの切実な願いが見え隠れしている。

* 大人の仲間入りのために 必要な儀礼

かつては「七つ前は神のうち」という表現が日本の各地で聞かれた。子どもは七歳になるまでは神の領域にいて、まだ人間の世界には片足しか踏み込んでいないと考えられていたのである。今日でもあまり廃れることなく行

われている通過儀礼の象徴ともいえる「七五三」の祝い、すなわち三歳、五歳、七歳の歳祝いは、子どもの健やかなる成長を願う親たちにとって大切な節目であったことは間違いないが、やはり中でも、もっとも重要な歳祝いは七歳であった。今日では、七歳は小学校に入学する歳でもある。そのことから考えても、七歳という歳は呪術的な意味だけではなく、子どもにとって心身の成長の上からも大きな節目であったのだろう。

ところで、古い時代の子どもの死亡率を調べてみると、江戸末期から明治初期の頃には、出産後では約35%の子どもが、妊娠段階から数えると約45%の子どもが七歳以前に死亡していることがわかる。およそ四割近い子どもが、幼くしてこの世を去っていたのである。七歳の歳祝いの背後には、幼い子どもの死亡率が高かった時代、不幸にして子を亡くした親の哀しみと、子を無事に七歳まで育て上げた親の安堵感がうかがえる。

七歳を過ぎた子どもが次に経験するのは、いよいよ大人の仲間入りをするための儀礼である。今日でこそ成人儀礼は満二十歳で行われているが、かつてはもっと早い時期に行われるべきものであった。たとえば京都とその周辺地域では、冒頭でも紹介したように、数え十三歳になった男女児が嵯峨嵐山の法輪寺に参詣し、本尊である虚空蔵菩薩から知恵を授



七・五・三 七歳のお宮参りで千歳飴を持つ女児
(イラスト：竹添 祐子)

かるといふ慣習がある。これが「十三参り」である。七五三の慣習が希薄であった関西地域では、十三参りはそれに替わる子どもの歳祝いとして、また一種の成人儀礼として古くから親しまれてきた。「十三」という数字は、虚空蔵菩薩の縁日である十三日に由来するものである。虚空蔵菩薩は天空を司り、虚空のような広大無辺な智慧や徳を授けてくれる仏として、地藏菩薩とともに古くから人々の篤い信仰を集めてきた。今日の十三参りでは、子ども

がそれぞれの願いを一文字の漢字に託し、紙に記して虚空蔵菩薩に奉納する。また帰る時は、桂川に架かる渡月橋を渡り終えるまでは決して振り返ってはならず、もし振り返ったらせつかく授かった智慧を逃してしまおうといわれている。十三参りは十八世紀後半から一般に普及したといわれているが、当時は、特に京都西陣の織物関係の工職人層の信仰を集め

ていたといわれる。すなわち虚空蔵菩薩から授かるとされる智慧のルーツは、針や織物の「技術」であったようだ。京都では、かつては十三参りを経ると少なからず大人の一員とみなされ、日常において種々の責任が課せられたと伝えられている。

* 儀礼を契機にして 生まれる結びつき

このように、乳児から幼児へ、そして大人へと成長してゆく子どもをめぐる諸儀礼は、その形や意味はいろいろ変容しながらも、今日でもなお必要な通過儀礼として継承されてきている。しかしその中で過去ともしっかり異なるのは、何といても通過儀礼を契機として形成される、親族や近隣などの共同体、あるいは同世代の仲間との結びつきではないだろうか。

一昔前の社会においては、子どもや若者たちは種々の儀礼を経るとともに、それを契機として同性の仲間を結成したり、あるいはさまざまな人たちとの間で「絆」を結んでいた。これらの「群れ」や「絆」の中で、集団生活の基本や大人としての常識を学んだのである。さらに異性へのまなざしや付き合い方を体得するのも、同性の仲間からであった。一例を紹介しよう。関西からは遠く離れるが、山形県温海町の日本海に面した浜中という村では、けやき(契約)姉妹という娘の組が存在した。数



けやき姉妹 けやき姉妹を決めるために藁のくじを引き合う娘たち (イラスト：竹添 祐子)

え十二歳と十三歳になった娘たちがひとつの組を構成し、その中で、年末のある日に藁のくじを引き、同じ藁を引き合った者同士が姉妹の契りを結ぶ。組の娘たちは大晦日の夜に、あらかじめ決めておいた宿へ集まり、断食と称する行を行う。また大晦日の夜は寝る前に、けやき姉妹ごとにお互いが持参した餅を交換し

て食べる。このような大晦日の行を三年間続けるのと、かつては嫁に行ってもよいといわれた。このような、血の繋がりのない者と親子や兄弟姉妹の関係を結ぶ、あるいは同年齢の若者や娘たちが組を構成するという慣習がかつては日本の広い地域で見られた。その背景には、実の親子や家族を越えて、社会の中でより強い後ろ盾を得ようとする要求の現われであると考えられる。

現代と比べて、集団性や人々との共生がはるかに重要であった一昔前の社会において、「群れ」と「絆」の中で自己を見つめ、他者と交わる経験を持つことは想像以上に大きな意味があっただろう。さらに、子どもから大人への過渡期にある若者たちを教育するシステムが、学校や家庭以外にも数多く存在したことに注目すべきである。集団性の欠如、引きこもりや不登校、いじめによる自殺、いくつになっても親離れできない若者たち、そしてその逆の親たち。子どもたちが「群れる」慣習が残っている地域社会では、いじめの例が少ないことが報告されている。このことは、子ども社会において群れること、すなわち集団性を重視する規律の存在がいかに大切であるかを物語っているといえるだろう。

CEL

八木 透 (やぎ・とおる)

● ● ●
 佛教大学歴史学部歴史文化学科教授、民俗学者。専門は民俗学・家族史。1955年生まれ。78年同志社大学文学部文化学科卒業、81年佛教大学大学院修士課程修了、84年同博士課程単位取得満期退学。博士(文学)。同大学の助教などを経て、2000年教授。主な著書は、『婚姻と家族の民俗的構造』(吉川弘文館)など。

る盾を得ようとする要求の現われであると考えられる。現代と比べて、集団性や人々との共生がはるかに重要であった一昔前の社会において、「群れ」と「絆」の中で自己を見つめ、他者と交わる経験を持つことは想像以上に大きな意味があっただろう。さらに、子どもから大人への過渡期にある若者たちを教育するシステムが、学校や家庭以外にも数多く存在したことに注目すべ